

独歩「春の鳥」考

一

国木田独歩の小説「春の鳥」は、次のように書き出されている。

今より六七年前、私は或地方に英語と数学の教師を為して居たことが御座います。其町に城山といふのがあつて大木暗く繁つた山で、余り高くはないが甚だ風景に富んで居ましたため私に散歩がてら何時も此山に登りました。

この小説が初めて発表されたのは、明治三十七年のことである。冒頭の「今より六七年前」というのを、その年から逆算すると、明治三十年前後にあたる。小説中の「私」を国木田独歩と仮定して（事實はそうなのだが）、独歩が明治三十年前後に「或地方に英語と数学の教師を為して居たことが」あるかどうかを調べてみる。少くとも足かけ二年は滞在していなければならぬことになる。なぜならば「春の鳥」の季節は秋から冬を経て春へと移っていくのであるから。しかし『国木田独歩全集』第十卷の年譜を見ると、

明治二十九年九月四日、元渋谷百五十四番地に転居。

同年十二月二十八日、民友社再入社に決し、議會筆記担当となる。とあり、明治三十年、三十一年ともに、そこから転居した形跡がない。それゆえ、冒頭の「今より」の「今」は、この小説が発表された年のことではないことが明らかになる。

工藤 茂

周知のように、独歩が「或地方に英語と数学の教師をして居た」のは、明治二十六年から明治二十七年のことである。「或地方」が九州であることは、「春の鳥」の三に「冬ながら九州は暖国ゆゑ天気さへ佳ければ極く暖かだ」と表現されていることから判明する。

「欺かざるの記」十月の項に、「（九月）三十日正午佐伯着」とあるように、独歩は明治二十六年九月三十日に大分県佐伯に上陸した。徳富蘇峰の紹介、矢野龍溪の推薦で鶴谷学館の教頭となるためであった。それからおよそ一年間佐伯に滞在し、翌年九月三日、汽船に乗って佐伯を立つのである。その間彼が鶴谷学館において英語や数学を教えていたことは、「欺かざるの記」の明治二十六年十月五日の項に、次のように記していることから明らかである。

昨日より始めて授業す、三時半（午後）より下級生の為めにナショナル読本二の巻を授く四時半よりリーディングを授く、午後八時半より代数学を授く、九時半より上級生の為めにスピンソン万国史を講ず、以て日課を了はる、

したがって、「今より六七年前」というのは、明治二十六年から二十七年までのことを指すのである。この年から逆算すると、「今」とは明治三十二年から明治三十四年までのいつか、ということになる。ところが、「予が作品と事実」の「春の鳥」の条には「そして此一編が七八年の後に出来たのである。」とある。この七八年の八年という年数を考

りありと眼に浮んで来る。

大分県佐伯市は毛利家二万石の城下町であつた。今でも城山の麓の養賢寺から城山の登山口まで、また登山口から頂上まで、昔の面影を残して奥ゆかしい風景を呈している。独歩はここで自然の真の姿に触れ、その風光をこよなく愛した。その結果誕生したのが「源おち」であり「鹿狩」であり「春の鳥」であつた。そればかりではない。たとえば「河霧」にも「小春」にも、その他の日記や散文にも、その影は色濃く投影している。中でも独歩は城山の自然に深く心を引かれていた。彼は「豊後の国佐伯」の最後に「佐伯は実に果物の古城市なり。此地に城山なく、番匠川なくとも、猶ほ彼の柿だにあらば以て再遊、三遊、四遊するに足る」と書きながら、しかし同じ「豊後の国佐伯」の三「城山」の条には、「余が初めて佐伯に入るや先づ此の山に心動き、余已に佐伯を去るも眼底其景容を拭ひ去る能はず、此の山なくば余には殆んど佐伯なきなり」と書いている。

今ここに、「春の鳥」の文学空間として設定された城山と重なる部分を、「豊後の国佐伯」より抜粋しておこう。

秋の半ば過ぎ、余は紅葉狩りせんとして城山の頂に登り、落葉蕭々の間屢々耳を澄まして風の行衛を追ひ、吾れ知らず古跡一種の寂寞に融け行々樂みたり。

今は残す処ただ其の石垣のみ。石垣の上、建物の有りし跡は今尚ほ平坦なり。雑草茂り、松生ひ立ち、灌木入り乱れ荒廃に任かせたり。

満山の樹木暗く繁りて幽径縦横、猿の如き少年も時に迷ふ事ありと聞きぬ。

夏の末、日已に城山の彼方に入りて、余光水色の如く西の空に起り、城山の古松墨絵の如く浮び出づる頃、幾百千とも知れざる

鳥の群輪を形りて飛び、其のうち一群は分かれて他の山に向て去ることのありと雖も、多くは城山の深林に峙を求めて投ず。

先にも書いたように、「春の鳥」の時間は秋から春へとは移っていくが、夏は含まれていない。したがって季節に関する限り、引用した第三番目の部分は、「春の鳥」とは重ならない。だが、「春の鳥」において重要な役割をなす城山の鳥が描かれていたので、これを抜粋した。

さて、小説中の「私」は、散歩がてらいつもこの城山に登っていて、秋のある日、不思議な少年と出合うのである。

二

「ある日曜の午後」「時は秋の末」、城山で枯枝を拾っている三人の小娘のキヤツという声に驚き、本から眼を離して見下す「私」の視界に姿を現わしたのが、「十一か十二歳と思はるる男の児」であつた。

(略)紺の筒袖を着て白木綿の兵児帯をしめて居る様子は農家の児でも町家の者でもなささうでした。

手に太い棒切を持つて四辺をきよろきよろ見廻して居ましたが、フト石垣の上を見上げた時思はず二人は顔を見合しました。子供は熟と私の顔を見つめて居ましたが、やがてニヤリと笑ひました。其笑が尋常ではないのです。生白い丸顔の、眼のぎよろりとした様子までが唯の子供でない私と私は直ぐ見取りました。

引用部分の後半最後の二行に描かれているように、「私」の眼前に出現した少年は、異常な、唯の子供ではない、怪しい児童として「私」には受けとめられる。そしてその「私」の受けた印象は、この児童の素性が分かるころまで続いていく。児童は「先生。何を為して居るの?」と「私」に問いかけ、「私」に呼びかけられると、高さ五間以上もある石垣を猿のように敏捷に登って、「私」の傍に突立つ。そしてニヤニヤと笑っている。名前を問われて「六」と答え、「六さんといふのかね」

と念を押されると、「児童は点頭うづなづいたまま例の怪しい笑を洩して口を少し開けたまま私の顔を気味の悪いほど熱視あつめて居る」。歳を聞かれると「妙な口つきをして唇を動かして」いるが、急に両手を開いて「一、二、三」と指折り数え、十、十一を飛ばして顔をあげ、「十一だ」と真面目に答える。その様子はようよう数を覚えた五歳ぐらいの児と同じに見える。やがて突然、「児童はワアワアと啞のやうな声を出して駈け出す」。「私」が呼び止めても振り向こうともせず、「烏々」と叫びながら天主台を駈け下りて、たちまちその姿を消してしまふ。

「春の鳥」における少年と「私」の出合いは、「私」の語りを通して以上のように描かれている。ところが「憐れなる児」では、その出合いが「吾等兄弟はじめて此家に移つるや、直ちに一個ひとこの小児を見たり年の頃十か十一なる可し」と書かれている。「吾等兄弟」とは独歩とその弟収とせ、「此家」とは坂本永年ながねの家のことである。

さて、「憐れなる児」ではさらにこの少年について、以下のように述べている。

孤児、学校に通はず、朝起くる毎に命ぜられて為す事は、家の周囲の掃除なり。(略)昼間は何事をなして日を送るか、吾未だよく知らずと雖も、僅に見たる処によれば、只うろろと庭の内、家の前などうろつき居るもののごとし。(略)

吾等暫時にして此小児の決して世の常の者ならぬを知りたり。

此挙動、其言語、凡て遅鈍にして少しも少年の快気なし。

「子が作品と事実」において、独歩は「春の鳥」の主人公白痴の少年の身の上話は皆な事実であるが、「此少年が城山で悲惨な最後を遂げた事は余の想である」と書いている。しかし、その出合いについてはなんら言及していない。「憐れなる児」において述べられている少年との出合いが事実であるとすれば、「春の鳥」に描かれている城山での少年と「私」の出合いは、独歩の想ということになる。

また、「子が作品と事実」には、「此少年の事を思つて、人間と鳥獸

の差別、生物と宇宙の関係など、随分城山の上で空想に耽つたものである」とも書かれている。だが、城山における少年の敏捷な行動や姿については述べられていない。しかも、「春の鳥」では少年の突然の出現、石垣に登る猿のように敏捷な行動を描きながら、「憐れなる児」においては先に引用したように、「此挙動、其言語、凡て遅鈍にして……」と述べている。「春の鳥」に表現した部分は他の散文や解説では意図的に省略したといえはそれまでであるが、しかし、その身の上、庭の掃除、教育については繰り返して述べているので、やはり城山における少年との出合いは、独歩の想に出たものと考えていいのではなからうか。

つまり、「春の鳥」は独歩が最も愛した城山の自然と、独歩がその教育に失敗した自痴の少年とを、一つに結びつける文学空間を創ることによって誕生した一篇の小説であつた、ということができよう。

三

「春の鳥」の二の場面は、一転して田口家へと移る。下宿住いの不由きから田口の二階に移転した「私」は、翌朝、城山で出合つた少年が庭を掃いでいることに驚く。そして、「六さん、お早う」と声をかけるが、少年は相変らず「私」の顔を見てニヤリと笑うだけで、言葉を出さない。

日の経つうちに、この怪しい児童の身の上が「私」には次第に解つてくる。名を六歳と言ひ、田口の主人の妹の子であつた。父が亡くなつたために、母と一緒に実家である田口家に戻つていたのである。そこで「私」は、田口の主人と六歳の母から六歳の教育の相談を受けることになる。

小野茂樹の『若き日の国木田独歩』(昭34・アポロン社)によると、六歳のモデル山中泰雄の母シゲ(坂本永年の妹)は、「余程抜けて居る人」では決してなかつたという。しかし独歩は、「春の鳥」では六歳の

母をそのように設定し、亡父の大酒とともに母からの遺伝による白痴とするのである。その理由については既に笹淵友一が、これは自然科学的解釈であり、「ゾラやゲーウインの思想に接触した結果と考へられる」と指摘している。異論はないが、この設定は最終章四の場面向けて、独歩が注意深く敷いておいた伏線であった。いったいにこの小説にはそのような伏線が注意深く敷かれていて、それがこの作品の構成をきりつと緊めて、優れた短篇小説にしている。

さて、一において、知能の遅鈍と動作の敏捷という背馳する印象によつて、異常な、唯の子供ではない、怪しい児童として「私」に受け止められた六歳少年は、この場面では「如何にも気の毒」な「哀れなもの」に変容していく。原稿用紙五枚ほどの長さの場面に、「哀れ」という語が五つも使われている。そして、それは四の場面にも継承されていく。つまり、六歳は白痴ゆえに「憐れなる児」として私に受け止められていくのである。

田口の主人と六歳の母の依頼を受けて、「私」は六歳の教育を試みる。しかし、その効果はいっこうに上がらない。そんな冬のある日、一人で城山に登った私は、天主台の石垣の角に馬乗りに跨がって、両足をふらふら動かしながら、眼を遠く放って俗歌を歌っている六歳を目撃する。

空の色、日の光、古い城趾しろかど、そして少年、まるで画ゑです。少年は天使です。此時私の眼には六歳が白痴とは如何どうしても見えませんでした。白痴と天使、何といふ哀れな対照でせう。しかし私は此時、白痴ながらも少年はやはり自然の児であるかと、つくづく感じました。

ここで注目すべきは、六歳が城山の中に置かれた時に初めて天使に見えたという点である。田口の家にあつての六歳、小学校における六歳、腕白をしては人を驚かさず六歳、そして私の教育を受けている六歳。それは「不具の中にもこれほど哀れなものはない」白痴の六歳であつ

た。その白痴の六歳が城山の自然の中にあつては天使だったのである。それゆえに私は、白痴と天使を哀れな対照と見、「白痴ながらも少年はやはり自然の児であるか」とつくづく感じるのである。

ところでこの箇所は、次の四の場面とともに「春の鳥」の核心をなす重要なところであるために、これまでいろいろな論じられてきた。だが、それらの論を整理してみると、おおよそ二つの項目にまとめることができる。一つは白痴讚美、もう一つは少年讚美である。しかし私はそれを讚美とするよりも祝福と見たい。独歩は過去において山中泰雄と会い、実際にその少年の教育を試みた。だが、なんらの結果も得られなかった。そのことを彼は「春の鳥」「憐れなる児」に繰り返しているが、「病牀録」にも次のように書いている。

『春の鳥』は余が佐伯当時、事実、ある少年を描けるものなり。現に今も生きて居れりと聞く。

その少年と云ふは、金箔附の白痴にて、奈何に啓発し、誘導し、教育するも、殆ど数の觀念なし。当時の余は甚しき空想家なりしを以て、慥に教育し得るものと信じて疑ふ所なかりき。脳組織中の或一部に障害ありて全機関の作用に障害を及ぼすものなるを以て、其れを除き去らば、自然の靈知は閃光の如く湧立つに相違なかる可しと信じて、亦疑ふ所なかりき。故にあらゆる方法を試みて教へつ、賺すかしつ、時には叱りつけてまで、泣くが如き思にて教育せり。然れども遂に教育の効果も見ること能はざりし時は、余と雖も自然を疑はざるを得ざりき。

ここに見られるのは独歩の悔恨であり、自分の労苦の酬われることのなかつた悔しさである。順序が逆になるけれども、その悔恨と悔しさを文学によつて救うのは「春の鳥」一篇を書くことであつた。その中で白痴の少年を祝福することであつた。そのために独歩は、自分が最も愛した城山の自然の中に、白痴ながらも自然の児として少年を生かし、そして、その自然に少年を帰すことによつて、山中泰雄を祝福

し、自分の魂を救済したのである。それゆえ少年は城山では天使のようであり(天使ではない)、自由に天翔ける春の鳥に転生するのである。この小説の題名の意味するものが、じつはここにあった。と同時に、この小説の主要な舞台を城山としなければならぬ必然性も、ここにあったのである。

ところで独歩は、どういう意味で「自然の児」ということばを使っているのであろうか。白痴については「春の鳥」の中で「白痴となる」と、心の啞、聾、盲ですすから殆んど禽獣に類して居るのです。兎も角人の形をして居るのですから全く感じがない訳ではないが普通の人と比べては十の一にも及びません」と書いているが、「自然の児」についてはなんら言及していない。そこで他の文章、たとえば「欺かざるの記」(日記)にそれを探ると、そこには「自然の児として神に面すべき消息を」弟収二に伝うとか、「吾自然の児として」漠然たる人と宇宙の関係を考える、などという使用例が見える。これを先に引用した「病牀録」の一文と対照して考えてみると、生まれてくる時自然から「自然の靈知」を継承し、それが「閃光の如く湧立」っている人間ということになる。

北野昭彦は「国木田独歩の文学」(昭49・桜楓社)において、「憐れなる児」「病牀録」「子が作品と事実」を例に挙げながら、次のような独歩の人間観を指摘している。

(略)「人間」は完全無欠なる「自然の靈知」を授かって生命を得たのであって、その自然から得た「靈知」が何物にも妨げられることなく「閃光の如く湧き立つ」ことこそ、人間の本来の姿なのだ(略)。「人間」は生まれ出るとき「自然の靈知」を授かる。だが、「禽獣」はそれを「自然」から授からない。この相違こそ、「春の鳥」の文章中にある「人類と他の動物との相違」なのである。

北野は右のように独歩の思想を要約した上で、さらに、白痴は同じ

人間に生まれながら、「自然の靈知」を自然から授かることなく「禽獣」の次元に住まなければならない、だからあくまでも憐憫の対象なのだと述べている。これは明解なる指摘である。この指摘に暗示を受けて私の「自然の児」の解釈はなった。つまり独歩は、城山の自然の中に白痴の少年を置くことによって、禽獣の次元に住む少年をそこから解放したのである。教育では救うことのできなかつた少年を、文学によって救済したのである。

四

少年が不慮の死を遂げる四の場面は、少年の死後「私」が一人で天主台に登り、哲学的なもの思いに耽った部分以外は、独歩の虚構である。そのせいか一箇所どうしても不自然と思われるところがある。それは六蔵が行方不明になり、「私」も田口の僕を一人連れ、提灯を持って夜の城山に行き、六蔵の死骸を発見するところである。独歩はそれを「天主台の上に出て、石垣の端から下をのぞいて行く中に北の最も高い角の真下に六蔵の死骸が落ちて居るのを発見しました」と書いている。しかし、実際に天主台に登ってみると、「北の最も高い角の真下」まで提灯の光が届いたとは思われない。したがってこの場面は独歩の創造した文学空間だったということができよう。

さて「私」は、六蔵の死因を「鳥のやうに空を翔け廻り積りで石垣の角から身を躍らしたものと考える。ここに至る伏線を独歩は最後のおよび三の最後に、巧みに敷いているので、「私」のこの考えは自然に肯定される。

六蔵の葬式の翌日、「私」は独り天主台に登った。そして六蔵のことを思うと人生不思議の思いに堪えなかつた。「人類と他の動物の相違」「人類と自然との関係」「生命と死」などという問題が、「私」の心に「深い深い哀を起し」た。「私」は童の霊が自然の懐に返つたという意

を詠じたワーズワースの詩を思い起こしながら、「この詩よりも六蔵のことは更に意味あるように」感じた。そして、石垣の上に立って春の空を自在に飛んでいる鳥を見て、それを六蔵だとみなすのである。

「人類と他の動物の相違」に関しては、北野昭彦の見解を先に引用した。「人類と自然との関係」についても、それと指示されてはいないが、そこに書かれている。つまり、人類は自然から「靈知」を承けて、自然の児として生まれてくる。しかし自然は、時に六蔵のような児をも生む。そして、このようにして生まれてきた者たちはまた、ワーズワースの詩のように自然の懐に返っていく。

それでは六蔵は自然の懐に返ったのであろうか。ワーズワースの詩よりも六蔵のことが更に意味があると作者が書いているのだから、そこにはもつと別な意味も込められていたと考えてよからう。その別な意味とは何か。それは六蔵を、六蔵が生前最も懂れていた鳥に転生させることであつた。

この小説の最後は、最も感動的な場面である。六蔵の新しい墓にお詣りするつもりで、城山の北にある墓地に出かけた「私」は、そこで六蔵の墓に語りかけている母親と出合う。この「憐れな母親は其児の死を却て、児のために幸福だといひながら泣いて」いた母親であつた。彼女はそれを繰り返しながら「私」に、六はなぜ鳥の真似をしたのかと聞く。鳥が好きだったからと答えると、彼女は両手を広げ鳥の搏翼の真似をして「斯して其処らを飛び歩きましたよ。ハイ、そうして鳥の啼く真似が上手でした」と眼の色を変えて話す。その様子を見て「私」は思わず眼をふさいでしまふ。

城山の森から浜の方へ、一羽の鳥が鳴きながら飛んでいく。すると母親は急に話を止めて、それを茫然と見送つていた。独歩はそこに、「この一羽の鳥を六蔵の母親が何と見たでせう。」という余韻の響く一行を添えて、この小説を結んでいる。

六蔵の不慮の死は独歩の想に出たものであつたが、六蔵の母親がそ

の死を悲しみながらも、その児のために幸福だつたと思う時、そこには不具の児を持った母親の心のリアリティがある。そしてそれはまた、独歩自身の想念でもあつた。

独歩は初め六蔵を奇妙な少年として「私」の前に登場させる。次にその少年の正体を明かし、「私」に哀憐の情を懐かせる。その上で、独歩が佐伯時代に最も愛した城山の石垣にその白痴の少年を配して、「私」にまるで天使のようだと見させ、自然の児かと思わせる。そして最後に、不慮の死を与えることよつて少年を自然の懐に返し、少年が最も愛した鳥に転生したと「私」に思わせるのである。その間、「私」の哀憐の情は一貫して少年と母親とに向けられている。これは、白痴に生まれついた少年の運命に対する独歩の同情から出たものであつた。

少年が鳥になるといふ発想を「片恋」に求めたのは安田保雄である。私もかつてそれを、大分の傾山に伝えられる吉作おとしの伝説に求めたことがあつた。それは、いわたけ(茸)を取りに来た吉作が岩棚に取り残され、自分が鳥になつた思いにかられて、岩棚から飛び降りて死んだといふ伝説であつた。

人が死んで鳥に化す伝承は日本にも古くからあるので、独歩の創意とは言えないだろうが、少くともこの作品では周到な用意のもとに、死んだ六蔵を「春の鳥」に見立てている。その意味について山田博光は、次のように書いている。

(六蔵は)白痴であることよつて普通の人以上に、地上にしばらくつけられ、自由を奪われている。六蔵が鳥に憧れるのは、鳥のように自由に飛翔したいからである。したがつて(略)鳥は自然の象徴であるとともに、自由の象徴でもある。

山田はその後で更に「ただ、六蔵がカラスに特に関心を寄せ、小説の結末で春の鳥とはいひながらウグイスではなく、カラスに六蔵が化身したと暗示しているのは、生きていたときの白痴の姿と照応し、一

層の哀感をそそる」と付け加えているが、これには多分に大人の見方が入っているのではあるまいか。前にも書いたように、この小説の間は秋から春までである。その間、六蔵はカラスや鳥に関心を示している。民間伝承の世界でもカラスは小供にとつてより親しい存在である上に、独歩自身城山の印象にカラスを描いている。そして六蔵の墓前でその母親に「ハイ、こうして鳥の啼く真似が上手でした」と言わせている。六蔵にとつてはカラスに生まれかわることこそ、その理想だったのである。それゆえ独歩は彼をカラスに転生させたのであった。そこには独歩自身の自然回帰の熱い希求も重ねられていたと思われる。さて、結論を述べることにしよう。「春の鳥」は、独歩があらゆる意味において心牽かれた山中泰雄を、彼が最も愛した城山の自然の中に少年のまま永遠に閉じ込め、そうすることによって彼を祝福した小説だったのである。そういった意味においてこの小説は、「独歩の佐伯時代を記念する名作」¹⁶となったのであった。

注

- (1) 明治37年3月15日発行の『女学世界』(第4巻第4号)に発表された。
- (2) 昭和43年10月1日第三刷発行・学習研究社。編著者は国木田独歩全集編纂委員会。なお同全集収載の「欺かざるの記」後篇の明治二十九年九月七日の項に「吾が身今は渋谷村なる閑居に在り。(略)四日に移転したり。」とあり、同年十二月三十日の項に「昨日人見氏と相談の上、再び入社することとなりぬ。」とある。
- (3) 坂本浩『国木田独歩』(昭17三省堂)、長谷川泉『近代名作鑑賞』第五版(昭58・至文堂)
- (4) 角川文庫『牛肉と馬鈴薯』(昭32)の坂本浩の「解説」。
- (5) 辻元明子説(長谷川泉『近代名作鑑賞』による)。
- (6) 安田保雄著『比較文学論考』(昭44・学友社)所収の論文。
- (7) そこには、「早や、夜の十二時も過ぎぬ。(略)今二葉亭の訳したるツルゲネ

フの片恋を読み終りぬ。」と書かれている。

(8) 『国木田独歩全集』第十巻(昭43・学習研究社)による。

(9) 独歩は佐伯時代、坂本永年の家に下宿した。小野茂樹「若き日の国木田独歩」(昭34アポロン社)によると、坂本永年は旧藩時代家老職、当時は百九銀行取締役兼鶴谷学館々長であった。独歩たちは三転してここに下宿したとある。

(10) このことについては既に小野茂樹が「春の鳥」(『若き日の国木田独歩』所収)の中に、次のように書いている。

「独歩の作品は、その描写にふしぎな迫真力をもっているために、小説中のどこが事実でどこがフィクションなのか区別がつかかねる場合が多いが、この「春の鳥」も細かに見れば、右の六蔵の墜落死の場面以外にも、潤色の部分だと考える箇所はいくらかあるようで、例えば末部の、六蔵の母親の狂人的なふるまいなど、それがいかにも事実そのもののように上手に描かれているが、勿論これは全く独歩の想に出たつくりごとであるし、或いは、城山頂上で村の娘たちが枯木拾いに来ていたという所は、前記したように独歩が目撃した事実に従っているが、その娘たちが六蔵を見て仰天し逃げ出したり、またその六蔵が独歩の傍に来て二人で話し合う場面などは、おそらく潤色だろうと思われる。

なお独歩は、この少年の両親や姉(父は山中正巳、母はシゲ、姉はトリ、小説中に独歩は母の実名を姉の名に用いている)をも、小説中に自痴少年に關係づけて、同情すべき人物として描いているが、坂本真澄氏はその実態について、その子の父正巳は決して酒飲みでなくまた母、姉ともに温和な普通の女性であったと思うがと云っている。

安田保雄は、小野のこの説を受けて「片恋」と独歩(『比較文学論考』所収)において、「春の鳥」(一)の六蔵の城山における敏捷な行動を、独歩は「片恋」の城趾を疾風の如く駆通るアーシヤに想を得て描いたものと推定している。同時に六蔵の母が六蔵死後、その墓前で鳥の搏翼(はたけ)をしながら「私」と語る場面にも、「片恋」の語り手の男とアーシヤが、人間に鳥の羽の生える

話をしている場面が取り入れられていることを、指摘している。

(11) 笹淵友一『「文学界」とその時代』下(昭38・明治書院 一四八六頁)。

(12) 片岡良一『日本浪漫主義文学研究』(昭42・法政大学出版局)には「わが国の作家では国木田独歩の『春の鳥』(明治三十七年)などに、そうした白痴を讚美する思想の片鱗を見ることが出来る。鳥のまねをして空を飛ばうと思つて高い崖から飛び落ちて死んでしまった白痴の死に、神の道に通ずるもの(尊さ)を感じようとするのが『春の鳥』には書かれているのである。そこに浪漫主義文学の一つの頂点があるとともに、その思潮のもつ反常識性への徹底があつたことも、考えられねばならぬことになるのである。」とある。

笹淵友一『「文学界」とその時代』には「独歩の意識によれば、白痴と天使、白痴と自然の児とは対立概念である。ただその白痴も少年であることによつて天使であり、自然の児なのである。だが単なる少年が六歳程の象徴性をもちえないことは明らかであつて、そのためには六歳は白痴であることによつて天使であり、自然の児でなければならぬであらう。これは紀州の象徴的意義を考へれば明らかである。この白痴の象徴性を「白痴ながらも」の象徴性にまで後退させたところに、独歩の浪漫精神の衰へと写実精神の発達とを見るべきであらう。」とある。

長谷川泉『近代名作鑑賞』第五版(昭52・至文堂)の「『春の鳥』」には「これは、白痴の六歳が、子供なるが故に、自然の中に融け込んで、人間たることを捨象し、自然の中の一点景となつてしまったことを示す。独歩が傾倒したワーズワースが、子供の自然な純真さのなかにこそ天国があることを歌つた有名な「幼年時代を追想して不死を知る頌」を思い起させる。(詩の英文題名省略)」とある。

山田博光『国木田独歩論考』(昭53・創世紀)の「春の鳥」には「白痴少年六歳の中に純真な少年の姿を発見し、感動しているのである。白痴であることによつて少年の純真さが一層そこなわれずきたとも言える。しかし、この作品は少年の純真さを讚美しているのである。その意味で少年讚美の作品と言ふべきであらう。」とある。

北野昭彦はこれらの説を批判的に継承しながら、『国木田独歩の文学』(昭49・桜楓社)の第七章「『白痴讚美』のロマンチズムと『春の鳥』」において、「略」六歳が「白痴であることによつて天使であり、自然の児」とはならず、「白痴も少年であることによつて天使であり、自然の児なのである」のも当然の帰結であつた。独歩の小説は、「少年讚美」にはなり得ても、はじめから「白痴讚美」にはなり得なかつたのである。六歳は積極的肯定の対象ではあり得ない。」と述べている。

(13) 注(10)を参照のこと。

(14) 拙稿「近代文学と口承文芸」(『口承文芸研究』昭60・第8号所収)。

(15) 『国木田独歩論考』(昭53・創世紀)の二〇〇頁。

(16) 長谷川泉『近代名作鑑賞』(昭58・至文堂)二二〇頁。